「表現としての労働」

－「産業と人間～未来幸福論～」のための断章－

藤　本　久　子

はじめに

ここで問題とする労働とは、生産関係、要素市場における労働力の定義の外側に眠る、人間概念を構成する一要素としての労働である。

K・ポランニーの「市場経済が普遍的なのではなく、市場経済、商品経済こそが、この広い地上において特殊で部分的な、限られたエポックに現れた一形態にすぎない」とする説諭に、突然目をひらかれたところから、この思惟の旅は始まった。[1] 産業の諸要因、すなわち労働・土地・(資本としての)貨幣のすべてを、流通素材＝商品化すべきものとして捉え、流通の円滑化が善であり、阻害要因が悪であるとして、その側面のみを全体化してしまえと要求する、そしてその要求が人間の内面支配にまで及んでしまう市場主義を、世界のあるべき唯一にして最終の真実であるかのごとく語ることは、I・イリイチが好んで使ったヴァナキュラーという語に集約されるような実在する諸文明への冒涜ではないかという印象をわたしは持っている。[2]

使用のために何かを生産する労働から交換のための労働へ、そして労働力の商品化へと、段階論的に把握されてきた労働概念を通時的に貫流する、「表現としての労働」という側面にスポットをあててみたいのである。[3] この分光はまた、様々な次元にある「労働の場」を照射し、その熱エネルギーによって、場を変容させる可能性をも秘めている。これはさらに、個から家庭に、家庭から地域に、地域からより広範囲の地方へと、場の境界を押しひろげる波動ともなりうるだろう。

1. 境界

ここで、何よりも大切な点として強調されねばならないのが、新しい波動がもつべきベクトルの矢印の向きである。中央政府から都道府県へ、都道府県から市町村へ、市町村から住民自治区へ、住民自治区から個人へと波及していくような従来のトップダウン方式とは正反対の方向性をもった動きが待望されていることに注意を喚起したい。この点に関し、故玉野井芳郎博士は次のように語っている。[4]

「『地方の時代』ということばが歴史のキー・ワードとして登場しつつあることには十分な理由があるように思われる。にもかかわらず、『地方の時代』を迎えることへの大きい不安が叫ばれだしているということ、これも否定しがたいところである。

その不安は、『中央』のほうが時代の流れを先取りするかたちで‥‥中略‥‥このキーワードを政策的に利用する動きを示すようになったことに始まる、という見方が『地方』ではつよい。これでは高度成長の破綻をみとめた『中央』がこんどは一転して、いわば『中央』のツケを『地方』へ回すだけのことではないのか、というもっともな論難である。」

昭和五十年代のこの記述が、市町村合併に関する議論が沸騰している今日、重要な警鐘をふくんでいることに気付く。それを踏まえた上で、個の位置で考え、個の位置で下された判断の集積が、合併するかしないかの結論を導き出している現在、それぞれの結論にはいずれも意味があるとわたしは考えている。相変わらず中央の判断で始まった動きであるにもかかわらず‥‥である。

問題となるのは、地方自治体という呼称でくくられた行政の単位、その地理的境界線である。この境界線がどこから発祥したものかを問い詰めてみると、封建時代の藩と封地を再編した廃藩置県の最初の分割線をオリジンとして受け継

いできたことに気付く。藩と封地はそれぞれに固有の文化・風俗を形成していた生活の領域そのものであった。統治の単位と生活の単位が百パーセントではないまでも、相当な重なりをもっていたのは明治の初頭までであったのではないだろうか。なぜなら、明治政府の富国強兵策に基づき、工業化の火ぶたが切られたことにより、人口の流動が起こり、工業都市が生まれ、農村は都市への人口供給源となったが、さらに交通機関の発達によって、大都市への集中、首都圏への集中が加速され、今日に至っているからである。[5] 今日まで、部分的に幾度かの再編劇を経たとはいうものの、藩と封地に基礎をなす境界はとっくに意味をなさなくなった。これをポランニー＆玉野井流にいうと、経済が社会＝地域社会から離床したのであり、それを歴史的前提として資本主義社会・社会主義社会という巨大経済システムすなわち工業社会が確立したのであり、労働力と土地が商品化されるという事態が生まれたのである。[6]

不合理になってしまった地域の境界線。それを引きなおすことによって、硬直化・閉塞化から脱する契機を得、その機を捉えて数々の不合理を是正するとともに、流動の際のポテンシャルエネルギーを活性化に結びつけようとする発想には、もともと頷けるものがある。と同時に、現在の単位の内部に文化・経済の確かな蓄積が感受され、それを解体するに忍びないとする住民の判断の集積として、提案された合併案にノーの解答が出されたとすれば、かつての玉野井博士の警鐘に呼応する健全な反応として、それも大いに意味のあることである。[7]

要は産業・文化・風俗を一にする住民の単位としての小集合、中集合、大集合の境界線が行政サービスの守備範囲に合致することが理想なのであって、提案された合併案がその理想にかなったものか反するものかで結論が二分されるのは当然であろう。ごく少数の民族で独立国を形成することが可能なように、国内の地方自治体という行政単位においても、独立圏域として極端な大小ができたとしても、むしろそのほうが自然であって、同サイズに切りそろえなければならないと思い込むことがそもそも間違っている。重要なのは個の尊厳が守られているかどうかである。[8]

個をめぐる環境をどう設計するかという観点がマクロな理論に反映されていなければ、そのような理論から出発した政策は抑圧を生む。個をめぐる環境が今日どのような問題をはらんでいるのか、そして、そのような状況に対峙したときの人間の、意志を伴った働きかけに、「労働」の motivation という視点を重ねあわせてみるとどうなるか、という考察を試みるのがこの論稿の目的である。

2. 市場（いちば）の幸福

ところで「状況」というのは、その渦中にある人間の視野にはおさまらないのが通例である。端的な鏡として、その社会で子どもたちが仕合わせといえるかどうか、それをわかりやすい指標の一つとみることができる。沖縄に移り住んで間もない玉野井博士の心胆を寒からしめたのは、二日間で七人の子どもが自殺したという本土の暗いニュースであったという。彼はこれについて「子どもが死ぬということは、音が消えた瞬間に起こるのではないか」という言い方をしている。[9]

わたしが衝撃を受けたのは、ここで彼がいっている「音」、つまり「生活の音」、「いのちの律動」というフレイズである。この「音」の中に人間性と呼ばれるいくつもの要素がコンデンスされている。生産関係から演繹した効率性の追求の延長上に人類の幸福があるのではないということに、彼は早くに気づいていたようである。このことのトトロジーとして、晩年の彼が郷里の柳井において朝市を再開し、そのような活動の中に無類の歓びを見出していたらしい事実が浮かび上がる。早朝の爽快な冷気に響く市の喧騒に満悦気に耳を傾ける玉野井翁の姿が彷彿される。そこにおける「音」は、作り手、運び手、売り手、買い手の声に、物を満載した木箱が荷台に置かれる音や、売買のつり銭がこぼれる音などが渾然とし、露で湿った野菜に付着

した土の匂いと共に運ばれてくる心地よい波長として感受されたにちがいない。市場経済・商品経済の暴走で人が失ったものは何か。取り戻せる場所はどこか。そう考えたとき、生きた空間として自分を育んでくれた土壌に、根から切り取られた理論の枝を大地にもどすという作業、玉野井翁の人生の総仕上げとして、この柳井の朝市を位置づけることができる。

中村尚司氏は玉野井芳郎著作集第4巻の編者として「等身大の学問への歩み」という貴重な論稿をその巻末に寄せているが、その中で、柳井の朝市に晩年の情熱を注いだ玉野井博士について、次のように述べている。[10]

「商家に育った玉野井にとっては体験的にも自明の事柄であるが、農産物の市場と土地・労働力などの要素市場とはまったく別個のものである。前者は等身大の世界であり、後者は地球儀に投影された擬制である。『柳井日日新聞』は、第一回朝市の反省会の席上で、『玉野井博士は感激のあまり、涙を流し声ふるわせて、祝辞と激励の言葉を述べた』と報道した。学問の探求のために家業を捨てた玉野井が、価値形態論と価格理論の研究を打ち切って等身大の市場(いちば)へ還る道を発見したときの涙である。」

この「地球儀に投影された擬制」が今日のグローバリゼーションの大津波となってわれわれに襲いかかり、日本という風土、トポロジーにおいて支えられてきたそれぞれの地域の地場産業・伝統・文化を無色・無味・無臭の均質素材に置き替えようとしているのである。その防波堤となりうるのは、居住区を単位とした生活空間の、地図上には現れない歴史と風土の境界線上に、地域住民が自らの手で築いた不可視の土塁でしかないだろう。つまり、グローバルなマーケットではなく、等身大の世界の等身大の「市場(いちば)」へ、学問も還るべきなのではないかという重大な問いかけがここにある。

過去の不幸な時代には居住区が抑圧の単位となったことがある。また別のとき別の場所では住民の小集団が解放のコンミューンを形成したこともある。解放の直後に新しい権力の支持単位として抑圧システムに擦り替えられた例もある。自由を愛する人々は、地域を再設計する際、良きにつけ悪しきにつけ、集団の単位がシステムとして機能してしまわないよう細心の注意を払わねばならない。団結や連帯という美辞麗句の裏面にいつも潜んでいるシステムへの傾斜に歯止めをかけ、自由エネルギーを保全する逆噴射装置はいつでも個人の内部にしかない。個人が個人という単位において幸福であることが肝腎であり、それを基礎に据えたところに新しい「労働」概念が構築されねばならないとわたしは考えている。それは市場経済・商品経済によってゆがめられた人々の「幸福観」を自然の恩寵の内部に引き戻すことと歩を一にし、根を共有するもう一つの枝に実る果実として収穫されねばならない。

3.「狩」と労働

生きとし生けるものの絶対の論理は、まず生きること、次に生き続けること、そして子孫をのこすことであろう。人間のすべてのMotivationについて、生存と種の保存を源泉的欲動と考え、そこから派生した変異欲求として捉えることができる。[11]

たとえば肉食獣にとって、「狩」はいかなる意味をもつのか。空腹のとき、それほどでもないとき、満腹のとき、「狩」の性質は微妙に変化する。空腹のとき、豹はひたすら獲物を求めて徘徊する。[12] 飢えが進行するほどに狩は苦役の様相を呈する。それほどでもないとき、周囲を観察する余裕があり、狩は自動化された習性、すなわちルーチン的性格を帯びる。満腹のとき、獲物を追ったとしても、単なる腹ごなし、「遊び」にすぎないので、わずかな障害や、他に好奇心をそそる対象の出現によって、途中で断念することになる。

豹の行動を支配しているのが、「ただいま現在」に限られているのに対し、人、特に近代人は、将来を予測し、ある関数の収束値に向かって変数を積み上げていくに似た行動をとる。人は、狩の獲物を腐らない貨幣に変え、これを蓄積する方法を会得した。これが人類の不幸の始まりである。なぜなら、蓄積が可能になったこ

とで、充足値が無限大になり、「満腹」に達することができなくなったからである。

苦役でないまでも、ルーチンの無限ループの振り子活動のうちに、労働者は定年を迎え、突然、機能停止を命ぜられる。長年の餌づけにより、もはや、独力で獲物を追う気力や体力を喪失した自己を発見する場合が少なくない。別のルーチンを探すしかない者、解放と捉え「遊び」に目覚める者、狩の本能が甦り、野に放たれたと感じる者と、多様に見えながら、過ぎし半生を回顧し、働くことの意味を問い直すという点では一様ともいえる契機にさらされる。

これが有限の時を生きる固体、人間の内部に生起する「労働」についての総括である。自分が食べるために、そして家族に食べさせるために、家族に食物を持ち帰ること。この範疇において労働は狩とほぼ同義であるようにみえる。しかし現代のこの労働は血わき肉踊る狩猟ではないし、獲物も湯気をたてる新鮮な肉ではない。何にでも化ける魔法の紙、すなわち貨幣である。食物を買ってもなお余った貨幣で生活に必要な様々な資材を入手するが、それらの資材を構成する要素は必ずしも生存に不可欠なものではない。厳密には欲しいものといえるかどうかさえ疑わしい。使用価値を超えて他人に見せびらかし、優位性を誇示するための要素が部分あるいは全体にふくまれている。[13] 市場経済が創造した架空の価値によって、欲しいように錯覚させられた幻想上の“記号”を、つい買わされてしまうのである。人々はいつの間にか、肉食獣の誇り高い本能を捨て、ボードリヤールの「消費社会の神話と構造」における消費時代の神にひざまずく信者に成り下がってしまった。[14] つまり人は他者に対して差異を主張するために、優位の記号を買うのである。人と人との関係性において自己の位置を築くことが消費を通じてしか実現されないような仕組み、「市場(しじょう)」にとって都合のよい価値のシステムが、この地上を席捲した結果である。

4. 生産と消費の神話

現代の先進諸国のダイナミックな生産様式のもとに生きる人々には、意識されない生理的な悩みがある。大量生産、大量消費の中で画一化したのは製品だけではない。人間もそのメカニズムに組み込まれ、時間労働者という画一化した側面において把握されるようになった。この生産機構の内部では、「わたしはAさんともBさんともちがうCである」と、いくら主張したところで、時給800円の、あるいは月給20万円の労働者としてしか捕捉されない。自分だけ時給810円、自分だけ月給20万と1000円なら大いに満足という程度に、独自性の主張は数値的に歪曲・矮小化されてしまう。

他方、製品も、彼または彼女の個性に関りなく、自動化されたラインの末端から均質なものが吐き出される。労働の現場だけではない。消費の現場でも同じことが起こる。そこで、隣家の洗濯機とうちの洗濯機が同じであることに我慢できるかできないかという問いが発生する。平等? それはいいだろう。うちにも隣りにも洗濯機がある。しかし、同じものではないところに満足と仕合わせ、あるいは不満と不仕合わせが集約され、その僅かな落差に目を奪われて現代人は暮らしている。

そこで経営が取り扱うようになったのが、労働の人間化と製品の差別化という二方向の課題である。多彩な車種を産むトヨタの生産ラインなども、この二つうちの後者に属する努力の一つに数えられるが、労働の人間化に関していえば、生産の効率化、モチベーションの高揚、労働災害の防止、社員の健康管理などと関係づけて論ぜられるかぎり、ここでの課題とは無縁である。[15] いずれも市場と生産の機構を維持することを目的としているからである。人間の生理・本能に触手が届くほどの深層の意識領野に焦点をあて、人間概念を検討する中から新しい労働概念を抽出しようとする行為は、いずれ市場と生産の機構にとって、脱構築と再編の論理として結晶せざるをえないだろう。その新しい視角はおそらく、市場(しじょう)にとって、すこぶる危険な、地下で胎動するマグマの性質を帯びざるをえないだろう。

われわれはあまりにも多くの時間をこの生産機構への奉仕に費やしすぎた。その結果、自由な個別的表現のための時間的余裕を失ってしまった。もはや自己主張の場は消費の瞬間にしかのこされていない。自己を手づくりで表現するほどの時間がない。料理の時間すらない。食卓に並ぶのはレトルトと出来合いのお惣菜である。料理には表現の余地がまだまだあったのに‥‥。それも仕方がないだろう。家事を男女で分かちあうのではなく、両方が家事から解放されたかったのだから。[16] 子どもたちもまた、父親・母親との個性的な接触を断たれ、託児・学校・塾または学童保育と、レトルト食品化していく。人を人とも思わない子どもたちが出てきた?当たり前であろう。子どもを子どもと思わない大人たちの社会なのだから。この大人たちは「人間」であることをやめ、「消費者」になった。「安いもの」「よいもの」「気に入ったもの」、つまり「消費」を追いかけて、労働以外の時間をすごすことに夢中である。遂には、労働の目的までが「消費」に擦りかわってしまったのだ。しかも消費されるのは使用価値ではない。使用ではなく所有に意味が付着している。その多くが差異化の記号群である。[17]

こうして“ハレ”における蕩尽が“ケ”の領域まで侵食し、過剰生産が地球環境をも壊していく。[18] つまりわたしたちは死の沼に向かって暴走する消費鼠の群れだ。と同時に、消費が減速すると不景気と失業の猫が背後に迫ってくる気配を、凍りつく思いで受けとめている。

リタイアすること、落ちこぼれること、群れからはぐれることこそが福音のように思われ始めている。[19] 生産と消費の機構から脱出し、個人を取り戻したとき、人は消費によってではなく、外部への働きかけによって自己を表現する術を再発見する。労働の新しい概念に目覚める瞬間である。そこにおいて人はアット・ホームな体温を冷徹化しないでもできる、ささやかな個人的な生産様式を工夫することができる。

原始にかえれと叫んでいるのではない。ここで重要なのは生産と消費の神話、強迫観念から脱出することである。コンクリートの建物の外に出て、空に向かって両手をひろげ、宇宙生命の本源に同化する自分を感じ、魂の自由を手に入れることである。労働時間の短縮とワーク・シェアリングの知恵、そして地球が総量として許容できる持続可能な生産規模を導き出すセンスがあれば、解決はコロンブスの卵のように容易だ。[20] かくしてわれわれは人生の目覚めている時間の少なくとも半分以上を、従来のように職場ではなく、家庭、そして地域において過ごせるようになる。と、言いたいところだが、これは未だ、本来慎まねばならない予言の域に属している。

5.「表現」と「労働」

貨幣なき時代、縄文の昔の労働はどのようであっただろう。日没とともに休み、夜明けとともに目覚める自然の理にかなった暮らしぶりであったにちがいない。獣の肉で一番好まれたのはシカとイノシシのようである。イノシシは人が作る畑の根菜類が大好物で、異様なくらいの繁殖力を有する。縄文人は六十種類くらいの哺乳類の肉と七十種類以上の魚を食べていたといわれているが、美味しい肉だけを乱獲することはせず、種の保存のため、繁殖期を気遣いながら、万遍にできるだけ多くの種類の、それもオスの成獣の肉だけを冬場に捕獲して食べていたという。[21] 生態系に関する知識が豊富で海の幸、川の幸も排卵期を外していたというから現代人より悧巧なことは間違いない。労働に関していえば、「平和と豊かさの１万年」という副題のついた根橋章著「縄文の心」の中に次のような記述がみえる。

「食糧獲得のために働くといっても、木の実を拾い集めてきたり、魚を捕ったり、狩をするていどでしたし、管理栽培や畑作にしても、稲作に要する過酷な労働も必要なかったのです。そしてまた、食事も一日に二回ていどでしたから、周囲に豊かな食資源があれば、一日にせいぜい二～三時間、長くても四～五時間も働けばよかったと推察している学者もいるくらいです。

さらに今日のように、ともすれば健康を害する深

夜労働などなかった時代ですから、縄文人は余った時間を土器や土偶造りに用いて‥‥。」

女たちの採集は一日せいぜい四、五時間、男たちの狩は短時間のこともあれば終日に及ぶこともあっただろうが、たっぷりの余暇の中で、土器が工夫され、玉の研磨術が発達し、皮の染色法が発明された。驚愕に値するのはその技術がヒスイの加工や弓の漆塗りなどに象徴されるように、相当、高度な域に達していたことである。他の部族との交易もあったそうであるが、それによって利を得るにはいたらなかったとみられている。それらの品々は彼らの宝であり、宝と宝を交換するために、自給の用以上に多くを生産することになったとしても、これを産業革命以降の労働と同一視はできない。

蛍が光の強さを競うごとく、そこには腕を競うということがあり、狩の能力をアピールするのと同等の、あるいはそれ以上の自己表出の領野が拓けていたのである。これらの能力は、よき友とよき異性を得るための切り札ともいえた。優れた子孫をのこすために、よき伴侶を選ぼうとして対抗馬と競うとき、この自己表出が決め手となった。「表現」による「意思表示」がなければ異性を獲得することができないのは自明であり、男は男たちの間で、女は女たちの間で、なんらかの形で優位性を主張し、同性を牽制しつつ、異性に対し、自己アピールする。つまり創造的な生産物は表現の結果であり、個々の人格と分かちがたく結びついており、間違いなく制作者の魅力を構成する要素となっていたのである。これは、自然淘汰の脅威にさらされた動物の、本能系の適合度に関する域内の競争であると同時に、集団としての種族をよりよく存続させるための知恵という側面をも含みもっていた。強力な新しい弓の工夫は優れた独創力の表出であり、異性を惹きつける魅力でもあり、獣の捕獲力を増すことによって共同体の生存を容易にするので、集団から尊敬されることにもつながっていた。この新しい弓を作るような労働を「表現としての労働」と呼びたいのである。[22] また、その素晴らしい弓をより長く保存するために、きれいな漆塗りを施す労働も、共同体の中で見守られた個性的な仕事、つまり「表現としての労働」である。個性の発現、個人の創意、他者への愛を原動力とするような労働を、そのように呼びたいのである。

「表現としての労働」にみられる個性・創意・愛情の幸福な一致が現代の工業社会にはない。知識労働といえども‥‥である。一介のサラリーマンが企業の機構の中で画期的な発明をしたとしても、特許もそれによって得られる利益も企業に属し、発明の恩恵に浴する位置にある消費者の誰ひとりとして、彼の名前すら知らないのが通例である。[23] 企業に吸収された彼の創意は若干の給与増、あるいは報奨金と引き換えられはするものの、新しい価値を生む力を喪失したと判断された時点で、容赦なく解雇される。プログラマーなどがまさにそうである。[24] 過労死寸前まで働いても、過去の蓄積が未来の保障につながっていかないのである。日本的経営の終身雇用が生きていた時代はまだしも、企業が共同体的性格を帯びていたから、その中で認められることに多少の意味は見出せたのだろうが‥‥。

何のために? 誰のために? という問いに遭遇し、無気力になってしまった人々が生きる意味を再発見するとすれば、巨大企業の無機質化した分業のセルの中ではなく、互いに顔を見分けられる小規模な共同体においてではないだろうか、という予感については、すでに多くが語られている。[25] だからこそ、「労働の人間化」に関する議論が活気を帯びたのであるし、日本的経営が問題になったとき、日本企業がふくみもっていた封建時代の残滓のごとき忠誠心と一体化した「お家意識」がすなわち共同体意識として作用し、報酬主義に毒されない労働の肯定的要素として固有の効率性を発揮してきたことに注意が向けられもした。[26] 問題は、そうはいっても、その場合の労働がやはり商品化されていたことであろう。封建お家主義的共同体意識という、計算外の要素までが、「グリコのおまけ」のように、今度は意識的に商品化の内側に取り込まれたとさえいえるのである。雇用者が「商品としての労働」を選別して購入しようとする

とき、労働者の企業への忠誠心と共同体的意識は、労働の質を決定する大切な要素として、いっそう重視されるようになった。[27] ダイヤを買おうとする人がクリアランスやインクルージョンの有無を調べるように、採用者は目の前に展示された「労働商品」の内面にいかなる動機が詰まっているかを、ためつすがめつ拡大鏡でのぞきこもうとするのであり、経歴を鑑定書のように評価の参考にする。

ポランニーは労働、土地、貨幣が商品化されることをゆゆしきこととして、次のような警告を発している。

「労働はすべての社会を構成する人間そのものであり、土地はすべての社会をそのうちに存在させる自然環境そのものである。市場メカニズムが、そのような労働と土地を包含するということは、社会の実体そのものが市場の法則に従属させられることを意味している。

……中略……

労働は、生活それ自体に伴う人間活動の別名であり、その性質上、販売のために生産されるものではなく、まったく別の理由のために作り出されるものである。また、その人間活動も、それを生活のその他の部分から切り離して、それだけを貯えたり、流通させたりすることはできないものである。[28]

……中略……

市場メカニズムが人間の運命と自然環境の唯一の支配者となることを許せば、いやそれどころか、購買力の量と用途の支配者になることを許すだけでも、社会の倒壊をみちびくであろう。なぜなら商品とされる『労働力』は、この特殊な商品の担い手となった人間個人に影響を及ぼさずには、これを動かしたり、みさかいなく使ったり、また、使わないままに放置しておいたりすることさえできないからである。このシステムは、一人の人間の労働力を使う時、同時に、商札に付着している一個の肉体的、心理的、道徳的実在としての『人間』をも意のままに使うことになるであろう。」[29]

まことにもって、もっともな指摘である。にもかかわらず、いかに純粋に商品生産のためだけに効率よく労働を組織流通させうるかを、われわれは絶えず論じてきたといえないだろうか。知識労働においてさえも、である。[30]

孫引きになるが、シューマッハーの「スモール イズ ビューティフル」の中で引用されたJ・C クマラッパの言葉をここで紹介して、この項を閉じることにしよう。[31]

「労働はその人間の哲学的所感の表現であるとともに人格陶冶の過程が演じられる最高の舞台である」[32]

6. 人為性の暴力と市場(しじょう)という教祖

生きることの本質は何か。自らの意志によって生きる以前に、生かされている事実を認識するところからわたしは出発したい。原始から今日まで、発生した魂の数だけ延々と繰り返されてきた重い問いかけがここにある。誰によって何のためにわたしは生かされたのかと。わたしが誕生する以前にすでに大宇宙があり、地球という自然があった。自然に感謝するのか敵視するのか。その恩寵と恵みを敬虔な祈りにおいて享受するのか理性の力で傲岸不遜に奪い取るのか。前者の視点からすれば後者の作用は悪魔の所業にみえる。古木がシロアリに食い荒らされるように地球も、予想外に繁殖した人類という害虫によって蝕まれ朽ちていこうとしているかに見える。宇宙、そして地球の自然を対象物として取り扱い、それに対峙する姿勢と、自らを空間的にも時間的にも、宇宙・地球の悠久の全体性に包摂された微細な一点として把握する感じ方の違いは、学問にかかわる態度にも必ず影響してくるであろう。

「リサージェンス」誌の編集長サティシュ・クマール氏はシューマッハーのアンソロジー集のまえがきで、精神性を欠いた経済学に対するシューマッハーの評価を紹介している。シューマッハーはそれを「愛のないセックス」に喩えたというのである。[33] すべての価値を数量化し価格に還元し商品化させ流通を促す巨大な機構に、そしてそれを支えるための諸制度に、何ゆえわれわれは、生きてあるものの尊厳を捨象され数値化されて従属させられねばならなかったのか。そこを検討する必要がある。

反市場主義として地域主義を打ちたてようとするのではない。市場がいつどのようにして現れたかを考えると、もともとそれは人間性に敵対して現れたわけではなく、前近代の非人間性を是正する観点から出発したことがわかる。いったい市民革命と市場のいずれが卵でいずれが鶏だったのだろう。この訝しい現象に、人間が人間を支配する権力の問題がクロスして悲劇が発生した。貴族に対してブルジョアジーが、ブルジョアジーに対してプロレタリアートがより多数であり、多数が多数であるが故に正しいとされる奇妙な論理が同時に発明された。神のもとに平等であったはずの人間の間に階級が存在し、ある階級が別の階級を支配するのを当然の理として、どの階級が支配すべきかという不毛な闘争のための議論が地上を覆った。権力欲にとり憑かれた教条主義者の声高なスローガンの所為で、階級などあってはいけないのだというラディカルな認識はトーマス・ミュンツァー以来、ずっと棚上げにされたままである。[34] 世襲によって固定された階級が否定された代わりに、分業による階級が是認され、そこにおける差別、とりわけ経済的な差別、もっと大きいかもしれないオパチュニティ・コストに関する差別が、上位にある者の貪欲な利己心によって無限大に拡張され、それぞれの階層において欲望もまた数量化され、拡大再生産され、世襲の亡霊が甦って悪事の温床になったりした。これほどまでに激しい人間の利己心を統御し、ある秩序を与えることによって、経済の動態的変化を人為性ではなく自律性にゆだねることによって、弊害を最小限にとどめようとする計らいが「市場」という教祖の役割ではなかっただろうか。神ならぬ人間の定めたまだしものシステム、それが市場であり民主主義であったのだ。

P.F.ドラッカーは現代を「社会による救済」が不可能になった時代として捉え、「新しい現実」の中で次のように述べているが、それに対し、有力な反論を見出すことができない。

「今や、社会そのもの、さらには社会活動、社会問題のすべてが、あまりに複雑である。「唯一の正しい解答」では、解けるはずがない。それら複雑なるものを解くには、解答は複数でなければならない。そしてそれらの解答のうち、万能のものはない。

……中略……

暴力的な政権奪取のもっとも一般的な原因である腐敗も、なくなりはしないだろう。‥‥多くの場合、無能な王に代わって、暴力的な王が登場するだけである。」

してみると、「市場」は無能な王というわけで、暴力的な王の登場を阻止しているというわけだろうか。世界は新しい救世を待ち焦がれているというのに‥‥。

「しかし、それらの新しい救世のための運動は、脱社会的なものとならざるをえないはずである。そもそも救世は、社会以外のものによる救済、個人による個人の救済、あるいはおそらく、社会からの逃避による救済しかありえないという前提に立たざるをえないのかもしれない。」[35]

シューマッハーの構想する救世、つまりスモールがビューティフルであるためには、個々の人間が信ずるに足る存在でなければならない。何のために、誰のために? 宇宙のために、地球のために、人類のためにという、より大きな概念のために自己投機できるような存在であれば問題はない。地球に対立する人類のエゴ、人類に対立する国家国民あるいは民族のエゴ、国家国民に対立する企業や地域共同体のエゴ、それらのいずれかに対立する個人のエゴを出発点とした動機が息をひそめ、なおかつ個人の闊達な創造性を開花せしむる方向で、人間の思惟と行動を、「労働」という舞台上に、ひとりひとりの人生の芸術作品として、クリエイトすることはできないものだろうか。「個人による個人の救済」として‥‥。

7. フェティシズムではなく生命主義によって

労働イコール商品というのは買い手にとってそうだというだけではない。生産プロデューサーは商品としての労働力を購入して消費するのだから、その売り手である労働者にとって、労働はいっそう端的に商品だといえる。産業革命によって、労働が「表現」と同義であった旧きよ

き時代は終焉した。労働は分業化され、単純化された断片的作業への専従を意味するようになり、人は人生の貴重な時間のなにがしかを、糧を得る代償として売り渡すことになった。労働から創造的要素が駆逐され、労働は売買の対象となったのである。こうして「商品化された労働」を拘束時間という形態で販売するのが労働者であり、労働者は労働者の権利として、効率と最適を求め、労働の場、すなわち自己の労働時間の「売り先」を選択することになる。売却済み時間における労働者の意志の滅却は言葉を換えれば「表現の抑圧」でもあった。余分なことはしなくてよいという以上にしてはいけないことに属する。商品である以上、労働でさえも、規格外は排除されるのである。均質性と歩留まりのよさ、それこそがクオリティとされるからである。手づくりの味やデザインが珍重されるようになったのは、消費財に文化記号的な価値が付随するようになり、共同体内に棲息する固体の差異化欲求がマーケティングによって戦略化されるようになってからである。

「労働」が売られる商品に転化するとき、労働者の中で人格の分裂が起こる。売られる自己と、できるだけ高く売りつけようとするマネージャー的自己への二分化である。後者が優位に立ち、超越的に前者をコントロールすることによって、分裂を阻止する努力が必要になる。期を一にして実存主義が脚光を浴びるようになったのだが、その関係を考察する先行研究については残念ながら、寡聞にして掌握できていない。[36]

8. fetish と vital

ここで fetish と vital という二つの形容詞について思いをめぐらしてみよう。生命の本質において欲するところを vital として、fetish の対概念として置くとどういうことになるだろうと。

消費におけるフェティシズムについては既に語ったが、労働の Motivation にもフェティシズムが内在する。fetish な欲求をみたす手段として労働が位置づけられるとき、種の保存欲求、本能的衝動にもとづく vital な意欲は舞台の裾に追いやられる。中央で踊り狂うのは偽善の仮面とストイシズムの衣裳をまとった欲望機械だ。[37] 本来聖なるべき労働の舞台において、呪物的な関心と虚栄心の靴を履いた半機械人間がコードのリズムを刻む。踊りの時間は数値化され、交換価値に換算される。カシミアのコート一着分の労働、あるいは新車一台分の労働として。このとき vital な表現衝動は抑圧され、原生的欲動は屈折して、滅びの予感、タナトスがエロスをエスコートするようになる。文化は腐る寸前の甘い肉、退廃に向かって洗練されていく。人工的な規範はいまや弛緩した老いた筋だ。逸脱をとどめ得なくなるが、そのことがむしろ人間性の回復、健全化に奉仕するようになり、デカダンへの陶酔が自由の象徴のように語られ始める。官能の所在を確かめるためにポルノグラフィーが氾濫し、それらが日常化するにつれて、人はますます vital な、つまり自然で健康的な欲情から遠ざかるという背理の構造において、性衝動までが商品化され、拡大再生産され、禁忌から解放されたおかげでいっそう陳腐化の速度を増す。フェティシズムの人工染料は潜在意識の深みにまで浸透し、本能の仕組みを壊さずにはいない。このような文明病的疲弊によって人類は徐々に不能化してゆき、子孫が減少し、種の衰退を招くことになる。

9. 芸術的創造

ところで、Vital な表現衝動の強い人間はたいてい、実存主義的二分化に失敗する。その結果、労働の場に適応することができず、はみだし者となっていく。この種のはみだし者は敗者という集合に分類され、この社会の活用不能部品として、倉庫の隅に置き去りにされるか、または二分化した人間の苦悩を代弁する芸術家として特殊領域に分類され、厚遇される場合もあって、突然変異的な逆転により勝者として人々の意識内部に君臨することもあり得るのである。それゆえ、芸術家は人々にとって、二重に憧れ

の対象となる。すなわち解放された者として、そしてもう一つ、超越的な勝者として・・・・。

たとえばアンディ・ウォーホールは特殊な表象であったマリリン・モンローや毛沢東の肖像をリピートすることによって、人々の潜在域にひそむ欲望、あるいは恐怖を一種の過剰生産、過剰供給に落とし込み、摩滅化させ、陳腐化させることによって、それらへの拘りから人々を解放した。「ポピュラー」という、人々のFetishな価値意識に対して痛烈な批判を浴びせたウォーホールの作品群は、摩滅のゼロ地点、折り返し点を記す記念碑のように聳える。対象化しえないがゆえに拘らざるをえなかった対象をこのように相対化したウォーホールの力業は彼の並優れたVitalな表現衝動をもって、初めて可能になったといえるが、このような感性は体制内化した思考の延長線上には決して生成されないだろう。

10. 二次的再編

では、倉庫に置き去りにされたその他の敗者はどうなるのだろうか。望ましからぬ極端な例としては、犯罪者や組織暴力団の構成員というケースも皆無ではないだろうし、政治や制度に対するルサンチマン的な反体制行動、極端な場合はテロ行為などに押し出されていくかもしれないし、あるいは抑鬱性の精神性疾患に陥るかもしれないのであるが、それらはむしろ特殊なきわめて少数の事例であって、多くは漠然と「こんなはずではなかった」と思いながら、不本意な職と不本意な収入に甘んじつつ、機の到来を待ちわびているのが通例であろう。あるいは、可能性の通路が歳とともに一つ一つ閉ざされていくにつれ、夢破れたと自覚し、「もう少しましな処遇」を目の前にぶらさげられ、それに向かってとぼとぼと歩む疲れたロバのように、やや軽めの荷をひく第二陣の労働者の戦列に、つまり多数の一部へと遅ればせながら再編入される道をたどることになる。

11. ジェンダー・バイヤス

とりわけ女性の場合、男女共同参画の声高なプロパガンダにもかかわらず、全般的に機会不均等であるのみならず、特に男性優位を容認しない女性に対する目にみえない無言の排除圧がこの社会を色濃く支配している上に、現実問題として、出産と育児、介護を必要とする家族の存在などによって、キャリアの形成は困難をきわめる。能力にみあった職責を与えられることもなく、置き去り部品化した有能な女性が数限りなく存在するが、これらの女性の一定部分を掬いあげたのが市民運動や社会貢献活動の領野であったというところに焦点をあてることも可能であろう。が、その場合の位置づけは、第一列をキャリアとし、第二列を再編入組とした場合でも、第三列めでしかないのである。男女共同参画は第一列において実現されるべきであるし、市民運動や社会貢献活動が戦列外にふるい落とされた女性たちの、社会参加の残余形態として、「仕方なく・・・・」の行動であっては困るのである。なにより本人のために、次に市民運動や社会貢献活動の健全な動機づけのために。

ところで、第一列からの被疎外者には、もう一つのルートが開けている。人生の大部分の時間を精神の自由の赴くままに費消できるからである。よって専業主婦が一番の高等遊民であったりする。[38] グルメ向きの食事処の昼食メニューはすべからく、展覧会帰りやカルチャーセンター帰りの優雅な専業主婦をターゲットにしている。これらの女性層の、趣味が嵩じて本業化したときの大逆転が実に痛快である。ノン・キャリアなるがゆえに自由精神を維持し続けることができた女性たちの優秀部分は、本質において、「表現としての労働」の闊達な体現者となる契機を、ともすればキャリア組より、いっそうふんだんに与えられているということができる。

12. ボランティアにおける二種類のモチベーション

社会貢献活動というフィールドの存在は、その活動によって利益を受けた人々にもまして、

そこに参加することによって自らの存在価値を再発見した人々にとって、いっそうの光明となる。対価に換算されないが故にいっそうの誇りを見出すことができるからである。

仏教者がすべての欲望を滅却したとき、なおかつ最後にのこるのが成仏したいという欲だといわれるが、フィランソロピーの精神の波形はいくぶんそれに相似する。よしんば若干の自己欺瞞をふくんでいたとしても、人には、善人でありたい、あるいはそれを一歩ゆずったとしても、善人と思われたい欲というものがあり、自己の善意を証明するチャンスとしてボランティアという様式が与えられていると考えられるからである。

一口にボランティア活動といっても、ある人にとっては贖罪かもしれず、ある人にとっては自己発現かもしれず、ある人にとっては政治的名声を得るための伏線であるかもしれず、ある人にとっては宗教性を帯びた慈善であるかもしれないのである。そこには、決して語られない本音、統計的数値では決して明らかにされない生々しい偽善的動機がひそんでいる可能性をなしとしない。以下は現実にボランティア活動に参加し、あるいは参加しようとしたにもかかわらず、断念せざるをえなかった人々の生の声である。

① 排他的で仲間に入れてもらえなかった。
② 個人のあらゆる欲求を優先させ、なおかつ余った時間だけを「施し」のように提供し、恩着せがましい態度をとる人たちに失望した。
③ 無償奉仕だからと、勉強や努力をしない姿勢に嫌なものを感じた。
④ 失敗を責められるとボランティアだからと開きなおる無責任さが不愉快

これらを、あまりにも美化して語られすぎたボランティアの単純な裏面として捉えることには賛成できない。Motivation が fetish か vital か。そこに帰着する。偽善的動機に基づく者たちは fetish な価値を高め、その目的のための効率性を追求するので、必然的に無責任・不勉強・傲慢・排他的にならざるをえないのである。しかし、心底、理念の実現に意を注ぐ者たちにとって、その活動は明らかに純粋表出であるといえる。前者が対外的に利他性をアピールしたがるのに対し、後者は自らの根源的欲求に基づく行動であるところから、利他性を喧伝することをそもそも必要としない。前者が保身的であるのに対し、後者は自己満足的ではあるかもしれないが、「ボランティアだから」という留保を設けることなく、際限なく犠牲的に自己投機していく。後者にとってはあくまでも「好きでやっていること」に属するからである。

これらの特性について論ずるとき、団体ごとの分類や評価は意味をなさない。あくまでも個々人を精緻に問い詰めていくしかないので、統計よりもむしろケーススタディの形で個人を対象としたストーリイ・テリングのような手法に依拠したほうが有効と思われる。

ボランティア、すなわち自発に基礎をなす労働こそが本来もっとも「表現としての労働」の近場にあるはずである。にもかかわらず、ジェンダー・バイヤスに起因する飛べない女の憂さ晴らしにすぎないような「仕方なく‥‥」が出発点であったり、汚れた動機に基づく偽善だったり、fetish な記号の追求だったりするところから、「虚偽の表現」に陥る危険性をなしとしないのである。その場合、ボランティアにおける労働は、本来商品化されねばならなかったにもかかわらず、商品化されそこなった劣位の労働、規格外のダンピング労働でしかない。

13. 生産力と自由

人類にとって、社会的諸制度に関し歴史的必然が存在し、それに向かう自由こそが自由であるという主張が、かつて一世を風靡したことがあるが、それは少なくとも民族であるとか結社であるとか、なんらかの集団の劇場的イメージと分かち難く結びついている。[30] この議論は歴史的必然を誰がどのような論拠で判定するかという解不能の命題をふくんでいたため、相対論的に解体せざるをえなかったのであるが、類としての生存が集団という単位でしか成立し得

なかった時代の形而下的発想として概括することは可能といえる。集団で狩をすること、集団で農耕をすること、集団で工業製品を作ること、集団で会社組織を運営することなどを絶対条件として前提した上で、社会的諸制度をより矛盾の少ない形態に変革していこうとする気運が組織され、政治結社化していったのであるが、これを阻もうとする勢力に対抗して、イデオロギーの自由という普遍化した次元でこれを是認させることこそが自由の本質とされたのである。

パリ五月革命以降の世相において、権力に対する自由という概念は明らかに変容した。反権力という用語における権力の定義が拡張されたのである。上記のような政治結社内部は無論のこと、マイノリティといえども、集団という集団がすべからく不可避的に内包せざるをえない組織保存原理に起因する抑圧の磁場すべてが否定されるようになったからである。[40] かくして自由という語は個人という単位においてのみ有効なタームとして一皮剥けたことになる。

ところで、このことは第一次産業及び第二次産業への就労人口が極端に減少したことと無関係ではない。少なくとも人類の一部は直接的な「生産」のための労働から一見、解放されたように見えるが、職業選択の幅が広がったにすぎないともいえるし、余剰によって無償で生かされているわけではなく、新たな仕事を構想しなければならなくなったともいえる。なにゆえここで、ワーク・シェアリングの発想が有効とならなかったのか。労働すなわち時間の拘束であるとするならば、人類はまたしても自由の鳥を取り逃がしたことになる。

ところが、この拘束時間の内部に創造性が持ち込まれ、表現衝動がみたされるのであれば、その労働はもはや苦役ではなくなる。有機農業による収量アップの方法を工夫する喜びなどはその一例といえるであろう。Social Enterpriseへの就職を考える人の多くは同様の喜びを、賃金の多寡よりも優先していると考えてよいだろう。

自由とは何か。人生の許された時間を自己の資質と表現欲求に基づいて自在に設計できる状態を指すのではないだろうか。

14. 生活のための労働と居住

実はここまで、ある意味で本末を転倒した議論を展開してきたといえなくもない。なぜなら、資本と利潤の自動律に動員された労働に対し、Vitalな表現衝動に基づく自己実現的労働を対置してきたわけであるが、それに先立つところの「生活のための労働」を考えてみないわけにはいかないからである。古代社会においては資本と利潤の自動律に動員された労働がなく、表現衝動をみたすための行動と生活のための労働が一致していたといえる。そもそも「生活のための労働」とは何か。食事を作り、衣服や住居を繕うような作業である。そのための財を手に入れるために貨幣を必要とし、その貨幣を得るために、人生の時間を売却し、そこで発生する労働が「生活のための労働」なのではない。それらはむしろ、「生活のために必要な、あるいは不必要な資材を購入するための犠牲」とでもいったほうがよい。

生活のための労働とは、たとえば自分をふくめた家族のために食事を準備したり衣服や住居を繕ったりすることである。現在は食材も家も衣服も貨幣によって購入しているわけだけれども、元来、自分や家族のために工夫し、力をあわせて拵えるというのが原型であり、そこには愛情に基づく創造性や表現が確かに介在したのである。それが今ではメンテナンスのみしか残されていない。生活のための財がことごとく製品として商品化していき、創造の余地が奪われ、表現は単なる商品選択に置き換えられてしまったからである。

であるから、家事労働を「評価されない労働」として類別して、これを賃金に置き換えて評価しようとする試みは、商品化されない労働原型の最後の牙城、生活のための労働モデルをも商品化してしまおうとする企てといえる。これは、愛情表現としての労働、生活のための労働が女性のみに押しつけられ、義務化されてしまったことから生じた裏返しの奇想というべきだろう。

また、そうした女性たちにとって、貨幣が第一義的な欲望の対象となってしまったことの現れともいえる。生活のための労働は家族の誰それだけに義務化されるべきものでないと同時に、機械的に均等である必要ももちろんなく、自発を原則とするものでなければならない。よって、やむを得ず他人の手助けを必要とする場合の介護や家事手伝いなどの仕事も、労働時間の売り買いの発想からではなく、人間愛の表現という範疇において、歓びにみちた行為として概念形成されることが望ましい。

人は本来、生活のための労働をしたいのに、そして、それが主となるべきであるのに、貨幣が第一義的な欲望にすりかわってしまったために、みな、錯覚をおこしているのである。休日にのんびり庭の手入れをするサラリーマンのその時間こそが幸福であることに思いをめぐらす必要がある。日曜大工の工夫の楽しさを想起する必要がある。なんと幼い日々の自由な遊びに似かよっていることか。その種のわくわくする時間こそが人生の大部分を占めるべきであって、そのようなスローな生活が定年後のやむを得ない生活としてイメージづけられてしまった意識の歪みをこそ是正すべきであろう。それにはまず、「お金がなくても生きられる社会」を築かなければならない。そのための方策を探るとすれば、それは居住区という単位において構想するしかないのであって、生活の現場とはいったいどこなのか、どこであるべきか、勤務先なのか家庭なのか、個々人がそこをはっきり峻別しなければならない。

家庭に中心を据え、それぞれが同心円を描くとき、もっとも濃密な重なりを形成するのが地域社会である。地域社会の連携を深め、そこに寄与する労働は生活のための労働の延長であると同時に自己表出でもあり、そこにおいてレーゾン・デートルを確かなものにしていく活動は、商品化された労働とはまったく異質の充足感をもたらすものであって、そこにおける social capital の蓄積こそが豊かさの指標であって然るべきであろう。地域こそ、第二の家庭となるべきなのである。

居住とはそもそも何か。縄文から今日まで、決して変わらない、いや、変ってはいけない生存の場の設計がそれであり、生存の場を支える創造的な労働として、共同体の中での自己の役割を明確にする「表現としての労働」があり、その中核をなすのがあまたの「愛情表現としての労働」であると、わたしは定義づけてみたのである。

註

1) K・ポランニー「経済の文明史」玉野井芳郎・平野健一郎編訳　1975年3月　日本経済新聞社

2) ヴァナキュラーという語句は I・イリイチも「シャドウ・ワーク」(玉野井芳郎・栗原彬訳1982年9月)の中で使用している。

3) 「労働の商品化」の重要性は十分承知しているが、本論からそれるわけにはいかないので、ここでは K・ポランニー「大転換」吉沢英成・野口建彦・長尾史郎・杉村芳美訳1975年4月東洋経済新報社刊の179ページを引用するにとどめておこう。「生産は、人間と自然の相互作用である。それゆえ、もしこの過程が交易や交換の自己調整的メカニズムを通して組織されることになれば、その時、人間と自然はこのメカニズムの軌道にのらなければならない。人間と自然は需要と供給に従属しなければならない。いいかえれば、商品つまり売るために生産される財としての扱いを受けなければならない。それがまさしく市場システムのもとにおけるしくみであった。労働という名で人間が、土地という名で自然が、売りものになった。」

玉野井芳郎著「日本の経済学」中公新書1971年11月刊205ページにも『人間の労働力はもともと商品ではありません‥‥』の記述がみえる。同趣旨において「労働の商品化」を理解されたい。

4) 玉野井芳郎著「地域主義の思想」1979年12月農山漁村文化協会　13ページより

5) 製糸工場に農村の若年女子労働者が大量動員されたことなどもその例といえる。

6) 玉野井芳郎著「生命系のエコノミー」新評論1982年11月刊 31ページ。同50ページにも『ポランニーもこの事実を大きく着目して、社会から経済が分離、離床したという表現を用いている』という記述がある。

7) 『高度成長の破綻をみとめた「中央」がこんどは一転して、いわば「中央」のツケを「地方」へ回すだけのことではないのか』という中田実の警鐘。中田実「地域共同管理の社会学」1993年8月東信堂刊の観点を援用すると、地域住民の「主体」成熟度こそが問題である。「住民が構想を主体的にとらえかえす力量をもっているならば、それは住民にとって地域の自治管理への前進の条件となる」22ページ。

8) 集団から孤立した超越的個人ではなく、イギリス経験論の道徳哲学の流れを汲むアダム・スミスが「道徳感情論」において述べている市民社会の秩序と共感の原理。アダム・ファーガースン、エドマンド・バークを経て、F.A.ハイエクによって継承された個人主義概念の枠組に留意。「自由な人びとの自然発生的な協力」こそが偉大な成果を生む。F.A.ハイエク著「市場・知識・自由」田中真晴/田中秀夫編訳参照。

9) 玉野井芳郎著作集第4巻1990年7月学陽書房231ページの『子どもが死ぬということは、音が消えた瞬間に起こるのではないか。人びとの生活の音です。それから断ち切られた瞬間に何かが起こるという気がしてならないのです。凶悪な犯罪などもその一つでしょう。人間が言葉を覚えるとき、ただ言葉だけを学ぶのではなしに音律を通して学ぶ。それがなによりも重要です。その音こそまさしく生活の音であり、いのちの律動ともいえる。』という記述。

10) 前掲著作集第4巻269ページ

11) 欲動とはフロイトの用いた概念であるが、丸山圭三郎の著書に「欲動」(平成元年9月弘文堂刊)があり、そのあとがきの中で丸山はフロイトを引き、「『心的なものと身体的なものとの境界の概念』(フロイト)であって、常に流動してやまない生のエネルギーのこと」と定義づけている。ここでは、その最も原始的な出発点とそこから派生したものを類別し、前者にシフトした形でこの概念を用いている。

12) バーナード・ワイナーは「絶食の程度が大きいほど、衰弱が起こるまでは、活動性が高まる」という絶食の強度と行動の関係についての Richter の実験を紹介している。林 保・宮本美沙子監訳「ヒューマン・モチベーション」1989年4月金子書房刊62ページ参照

13) 丸山圭三郎「文化のフェティシズム」1984年10月勁草書房刊もあるが、ここではボードリヤールに依拠。他から自己を個別化、差異化するための「記号」が消費されているという考え。ボードリヤールの「消費社会の神話と構造」序でJ・Pメイヤーも引用している通り、「洗濯機は道具として用いられるとともに、幸福や権威等の要素としての役割を演じている。後者こそは消費の固有な領域である。ここでは他のあらゆる種類のモノが、意味表示的要素としての洗濯機に取ってかわることができる。象徴の論理と同様に記号の論理においても、モノはもはやはっきり規定された機能や欲求にはまったく結びついていない」今村仁司・塚原史訳

14) J・ボードリヤール「消費社会の神話と構造」今村仁司・塚原史訳1979年10月紀伊國屋書店刊109、110ページ参照。ボードリヤールは、メルセデス・ベンツを買うために、76色697種類の内装の中から一つを選ぶ行為と、髪染めのほんの少し明るい色を選ぶ行為に共通点を見出している。われわれは自分自身であることを主張するために必死になって差異を求めているのだという、そこが共通点となっている。「消費社会の神話と構造」13ページを参照。

15) 奥林康司著「労働の人間化」1981年6月有斐閣刊の巻末に付せられた国内外の文献リストがよいリファレンスを提供。法政大学原社会問題研究所叢書の「労働の人間化」1986年4月刊はこの範疇での労作。ここでの議論に無縁でない参考書は「現代技術と労働の思想」1990年2月有斐閣刊所収の筆宝康之論文。

16) 岩波書店から刊行されたI・イリイチの二著、「シャドウ・ワーク」玉野井芳郎・栗原彬訳1982年9月刊と「ジェンダー」玉野井芳郎訳1984年10月刊の観点があるが、深入りせず、単にシャドウ・ワークからの解放ということにしておく。ここでは家庭内部のヴァナキュラーな価値の喪失として触れた。しかし、竹中恵美子編「グローバル時代の労働と生活」1993年7月ミネルヴァ書房刊の第四章356ページの服部良子氏の「労働は産業化によって、賃労働と家事労働に分離する。前者は生産という行為とみなされ、後者は消費という行為とされる。」という表現はなかなか歯切れがよい。この場合、前者は商品価値があるが、後者には商品価値がないと言い換えてみたい誘惑に駆られる。

17) ここでは「差異」という概念を通俗的かつ否定的に用いているが、本来は違う。既存のものに対する差異の主張は創造と重なる。消費において差異の主張をなそうということがそもそも問題なのであって、創造の現場では逆になる。ジャック・デリダが着眼したように(「差異とエクリチュール」)、差異は脱コードの戦略であり、表現の翼がはばたくときに散らばる華麗な羽毛だ。

18) 栗本慎一郎著「幻想としての経済」1980年12月青土社刊の蕩尽 or 消尽。過剰生産分をハレ、つまり祝祭空間で蕩尽することによって生産の歯車が円滑に作動する。それ以外の「労働と蓄積」の日々がケ、つまり日常空間であり、ハレとケの交互的なメカニズムが経済を支えていることに着眼したい。しかし、今日、日本のような典型的な消費社会では、蕩尽は日常化しており、消費の観点からすればハレとケの境界がみえなくなっている。カールとマイケルの両ポランニーと共にジョルジュ・バタイユを参考にした。

19) 1970年頃のヒッピー、ボヘミアン、そしてフリーターの出現などがまさにそうであったが・・・・。

20) バブル経済で企業の利潤が最高の域に達していたとき、政府がなすべきであったのは労働時間の短縮とワーク・シェアリングによる過剰生産の抑制であったと確信している。それによって雇用が維持されると同時に、余暇の増大による生涯学習・趣味などに振り向けられる別の消費構造が生まれたはずである。企業の急激な資本蓄積が急激な海外進出に結びつき、その急激さの故に国民経済を窮地に陥れた。つまり一国の経済において、ケインズは参考にされなかったも同然である。

21) 小林達雄「縄文人の文化力」1999年12月新書館刊

22) I・イリイチがホモ・インドゥストリアスと対比する形で、ホモ・アーティフィクスと呼んだ特性に照応する。「シャドウ・ワーク」2の結語部分。

23) たとえばコンピュータやデジカメのユーザーであっても、数兆円に及ぶ利益をもたらしたとされるフラッシュ・メモリーの発案者は誰かと問われたとき、答えられる人間はごく限られているだろう。特許法は、従業員が職務上の発明をした場合、特許権は従業員に帰属し、企業は「相当の対価を払えば」権利を移せると定めているが大半の日本企業では、就業時間内の成果物について、社員みずからが個人で特許申請するような仕組みや習慣がなく、特許申請自体が会社の機構にゆだねられ、会社への移管手続きもごく自動的、形式的に行われるところから、当人自身にさえ見過ごされている可能性がある。

年間2000億円の市場といわれる青色発光ダイオード訴訟の中村修二・米カリフォルニア大サンタバーバラ校教授でさえ、みずから譲渡証書に署名しておきながら、日亜化学工業に勤務していた1993年当時はそのことに関する知識がなかったと吐露している。対価はわずか二万円だった。そのような譲渡証書には法的拘束力はないとして特許権を取り戻すための訴訟を行ったが、特許権そのものについては、2002年9月東京地裁が「日亜側にある」との判断を下し、中村教授の要求は退けられた。その後、「相当の対価」をめぐって争っていたが、会社側に、利益の50パーセントにあたる604億円の支払い義務があるとした2004年1月30日の東京地裁の裁定に、その額が巨大であったこともあって、世情騒然となった。詳しい

経緯については東京永和法律事務所の Web サイト http://tokyoeiwa.com/led/proceeding を参照させていただいた。

今日の労働が製造過程における単純作業ではなく知識生産化している以上、それらのいちいちについて、個々の社員に帰属を認めるとすると、企業の存立が危ういという暗黙の了解が社会全体を色濃く支配しており、そのこと自体は知的財産権に関する問題もふくめ、大いに議論を要するところである。開発費として計上された予算の大半を人件費が占め、長年の努力が必ずしも画期的な製品の開発に結びつく保証もない、つまり多大の投資上のリスクを会社が負っているという事実や、研究設備や資材の費用、既存の研究成果の提供、必要な共同研究の組織的人材供給、あるいは社会的信用の賦与などが不可欠の前提条件になっている状況を無視できないとなると、相当に悩ましいものがある。特許の対象にならないような小さな工夫が日々、無数に発生しているが、それらは会社の利潤のために現に動員されているのであり、そのような事情を労働者の側が雇用契約において了解している面もある。これらの問題を現行法解釈の帰趨にゆだねることで事足れりとするわけにもいくまい。逆に、国際標準化の流れや企業およびステークホルダー間の調整という側面が法的な判断にも影響を及ぼすようになるとみてよいだろう。

24) 知識生産の時代にはいっそう、著作権をめぐるトラブル激増が予測される。訴訟社会の到来にそなえ、司法関係者の増員をはかる施策などもとられ始めている。

25) E.F.シューマッハーの "Small is beautiful" のスローガンをここでも典型的に採用できる。

26) アルフィ・コーン「報酬主義をこえて」田中英史訳 2001年2月法政大学出版局刊

27) 日本における就職はビジネスライクな契約関係というより、全人格的な投与を意味してきた。したがって職場はゲゼルシャフトではなく、ゲマインシャフトのように意識された。

28) K.ポランニー「経済の文明史」玉野井芳郎・平野健一郎訳1975年3月 日本経済新聞社刊29ページ

29) 同29、30ページ

30) ナレッジ・マネージメント関係の研究も市場での優位を築く方法論として議論されることが多かった。しかしその中に、場の哲学が持ち込まれるに及んで様相が一変した。野中郁次郎氏の労作には敬服する。

31) E.F.シューマッハー「スモール イズ ビューティフル」小島慶三・酒井懋訳1986年4月講談社刊

32) ここでは上記訳者の訳文ではなく、藤本訳を記させていただいた。

33) シューマッハーが「リサージェンス」誌に寄稿していたもののアンソロジー集が1977年に出版されたのであるが、ここでは2000年4月発行の懇談社文庫の邦訳「スモール イズ ビューティフル再論」酒井懋訳を参照。実際には、精神性を欠いた経済学という表現ではなく、「仏教抜きの経済学」と、端的にいっているが、ビルマをはじめとする仏教国へのシューマッハ特有の深い敬意が根底にある。

34)「アダムが耕し、イブが撒いたとき、だれが貴族であったのか」というトーマス・ミュンツァーの言葉はつとに有名であるが‥‥。

35) P.F.ドラッカー「新しい現実」上田惇生・佐々木実智男訳1989年7月ダイヤモンド社19〜23ページ

36) 鈴木亨著「実存と労働」1958年5月ミネルヴァ書房刊に期待したのだが、アプローチがちがうために、示唆を得ることはできなかった。

37) ドゥルーズ＆ガタリ著市倉宏祐訳1986年河出書房新社刊「アンチ・オイディプス」の概念

38) かつて筆者が中日新聞の連載コラム「辛口診断」において、「専業主婦は高等遊民」と書いたところ、読者から大きな反響があった。

39) ここでいう劇場という概念は、フランシス・ベーコン著「ノブム・オルガヌム」の中の四つのイドラの概念の一つ「劇場のイドラ」を指す。

40) いわゆるスターリニズム。対外的に組織を守り、発展させることと、組織内権力者の権力保全がすりかえられ、外部の敵を口実に、組織の成員である個人による上層部批判を封じこめる傾向。

参考文献

●A.スミス「道徳感情論」水田洋訳2003年2月　岩波書店

●B・ワイナー「ヒューマン・モチベーション」林保・宮本美沙子監訳　1989年4月　金子書房

●E.F.シューマッハー「スモール イズ ビューティフル」小島慶三・酒井懋訳1986年4月講談社

「スモール イズ ビューティフル再論」酒井懋訳2000年4月講談社

●E.ウェンガー他「コミュニティ・オブ・プラクティス」野村恭彦監修／櫻井祐子訳　2002年12月翔泳社

●F.A.ハイエク「市場・知識・自由」田中真晴・田中秀夫訳1986年11月　ミネルヴァ書房

●I・イリイチ「シャドウ・ワーク」玉野井芳郎・栗原彬訳1982年9月　岩波書店

「ジェンダー」玉野井芳郎訳1984年10月　岩波書店

●J.デューイ「人間性と行為」河村　望訳1995年7月人間の科学社

●J・ボードリヤール「消費社会の神話と構造」今村仁司・塚原史訳　1979年10月　紀伊國屋書店

●K・ポランニー「経済の文明史」玉野井芳郎・平野健一郎編訳　1975年3月　日本経済新聞社

「大転換」吉沢英成・野口建彦・長尾史郎・杉村芳美訳1975年4月東洋経済新報社

「人間の経済」玉野井芳郎・栗本慎一郎訳　1980年6月24日　岩波書店

●P・F・ドラッカー「ポスト資本主義社会」1993年7月 ダイヤモンド社

「ネクストソサイエティ」2002年5月 ダイヤモンド社

「新しい現実」1989年7月ダイヤモンド社

●今村啓爾「縄文の実像を求めて」1999年10月　吉川弘文館

●奥林康司「労働の人間化　その世界的動向」1981年6月　有斐閣

●栗本慎一郎「幻想としての経済」1980年12月青土社

●小林達雄「縄文人の文化力」1999年12月　新書館

●神野直彦「地域再生の経済学」　2002年9月　中央公論社

●鈴木亨著「実存と労働」1958年5月ミネルヴァ書房

●竹中恵美子編「グローバル時代の労働と生活」1993年7月　ミネルヴァ書房刊

●玉野井芳郎「日本の経済学」1971年11月中央公論社

「地域主義の思想」　1979年12月　農山漁村文化協会

「生命系のエコノミー」1982年11月　新評論

「エコノミーとエコロジー」1978年3月 みすず書房

玉野井芳郎著作集4「等身大の生活世界」中村尚司・樺山紘一編　1990年7月　学陽書房

●中田実「地域共同管理の社会学」1993年8月東信堂

●根橋　章「縄文の心」1998年7月　中日新聞本社

●野中郁次郎「知識創造の経営」　1990年　日本経済新聞社

野中郁次郎 / 竹中弘高　「知識創造企業」1996年東洋経済

●筆宝康之・井野博満・飯島善太郎「現代技術と労働の思想」1990年2月　有斐閣

●丸山圭三郎「欲動」　1989年9月　弘文堂

「文化のフェティシズム」　1984年10月　勁草書房

●嶺　学他「労働の人間化　人間と仕事の調和をもとめて」1986年4月法政大学大原社会問題研究所

●山崎　謙「よみがえる縄文の都」1995年12月 DHC

LABOR AS HUMAN EXPRESSION

HISAKO FUJIMOTO

The new concept of labor discussed herein lies outside the definition of the relation of products or factor market work, and encompasses elements that compose what it means to be human.

Karl Polanyi asserted that the market economy is not universal and it is the market economy and the commodity economy themselves that are special and partial forms which have appeared in limited epochs around the world. The various elements of industry--labor, real estate and all currencies (as capital)--are treated as distribution materials as items that should be merchandized. The market fundamentalism that accepts everything, promotes smooth distribution as the good and eliminates everything, blocking any distribution on competition as the wrong is only one of the many biased ideologies. Nevertheless, we have been required to speak as if market fundamentalism would be the single ultimate truth and to change the world according to the conveniences of the market. It can be said that market fundamentalism itself is responsible for steadily destroying the global environment and for the serious crime of meddling with other countries and sometimes causing wars.

Meanwhile, the market as God, while being bottomless and insatiable, has a fragile skin that easily succumbs to necrosis. It must continue to produce new products from the next to the next for a demand that becomes quickly saturated, otherwise it will succumb to the decaying bacteria of recession. It unnecessarily whets the appetite of people who try to create demand where there is none. In trying to satisfy this artificially created desire, people must sell their valuable time as a cheap labor power commodity. The dominance of the market as God affects people internally. Humanity and everything in nature are thrown into the commercialization process, and this limitless acceleration rapidly eliminates the earth's resources, folk traditions, and philosophical wisdom.

Before the market as God made its appearance, life and work were connected in a more constructive way. In the process of systematically moving from work that produces things, to work performed for exchange and then to the commercialization of work, there is an important element that is apt to be lost. And that is the "joy of work," which diachronically runs through the work concept. Under what circumstances does work become joyful? When it is a form of self-expression; when it is an expression of love for others; when it is received with gratitude by others. Working only to live will never satisfy people. There has to be the urge, the desire for expression bubbling up from the depths of instinct. How did modern work get separated from this primordial life energy? A giant holding the whip of currency stood at the point where these two parted ways, driving the sheep from the land of the true God to the man-made world of the new God.

This analytical view reflects the "location

of work," which exists on various dimensions, and conceals the possibility of transforming the location by its heat energy. Like an expanding wave, this endeavor will push out the boundaries of location from the individual to the family, from the family to the community, and from the community to larger areas.

The absolute logic of all living things is first to live and then to continue living by leaving offspring. For all human motivation, survival and the preservation of the species can be thought of as the source of instinctual drive and can be treated as the variant desire derived from this drive. For example, what meaning does "hunting" have for carnivorous animals? The substance of "hunting" will subtly vary depending on if the animal is very hungry, somewhat hungry, or not hungry at all. When it is hungry, the panther will prowl for prey with a single-minded purpose. As the animal's hunger increases, the hunt will take on the aspect of drudgery. If the panther is not particularly hungry, it has time to observe the surroundings and the hunt will take on the character of a habitual act, or a routine. When the panther has a full stomach, pursuing its prey will be no more than working off a meal or a "game" that can be stopped as soon as the slightest obstacle arises or something else catches its interest.

Whereas the panther's behavior is ruled by the "here-and-now," humans--and particularly modern humans--anticipate the future and accumulate variables with an eye on the convergence value of certain functions. People switched to hunting money, a prey that will not rot, and figured out how to accumulate it--which was the start of humanity's unhappiness. Why? Because when accumulation becomes possible, the satisfaction value becomes infinitely large and a "full stomach" becomes unattainable.

Even though they are freed from drudgery, workers swing back and forth in an endless routine until they are ordered to stop working as they approach retirement age. Being artificially fed for years, they have many chances to discover the self that forfeited the vitality and strength to pursue prey on its own. Although they appear varied, those who have no choice but to look for another routine, those who wake up to the "game" of grasping liberation, and those whose hunting instincts have been revived and feel like they have escaped into the wild are all exposed to the same opportunities when they look back at the half of their lives that has gone by and question the meaning of work.

This lumps together solids that live for a finite period and the idea of "work" that emerges inside a human being. Food is brought home to feed oneself and to feed one's family. In this category, work appears to be practically the same as hunting. Modern-day work, however, is not a thrilling hunt and the prey is not fresh, steaming-hot meat. It is paper that can turn itself into anything--in a word, money. Although the various necessities of life are obtained with money left over after buying food, the elements that make up those necessities are not indispensable to existence; strictly speaking, they might even be called objects of desire. The element of going beyond use value to show off or display superiority over others is either partially or wholly present. The fictitious value created by a market economy produces imaginary "signals" that provide

the illusion of desire and make us want to buy things. Without realizing it, we cast aside the proud instincts of carnivorous animals and condescended to serve the demon of consumption. In order to assert differences from others, people will never stop buying symbols of superiority. As a result, the world has been taken over by a system of values convenient to the market, where things are arranged so that in relationships between people, the only way we can realize where we construct a position for the self is through consumption.

We have spent too much time in service to production mechanisms, so we have no time to freely express our individuality and there is no longer any place for self-assertion except in the moment we buy something. In the brief time we have been freed from work, we ceased to be "human beings" and became "consumers." We pursue "cheap things," "good things," and "things we like"--in other words, "consumption"--and are hooked on the time we spend outside work. In the end, "consumption" has even become the purpose of work. However, there is no use value in consuming things, for there is meaning in ownership, not use. For the most part, consumption is differentiation between symbol groups, and we are basically a stampeding herd of consumers racing toward death. In addition, if consumption slows down, it is interpreted with cold rationality as the hint of recession and unemployment.

Retiring, falling behind, and deviating from the group are the start of evangelism. When people escape from the mechanisms of production and consumption and recover their individuality, they re-discover the art of self-expression by going out to work, rather than by consuming. That is the moment when they wake up to a new concept of work, when each individual can discover modest but creative forms of production. One steps out of his concrete structure, looks up to the sky with arms outspread, and feels himself being absorbed into the source of cosmic life as his soul becomes free. If we have the sense to draw on the wisdom of shorter working hours, work sharing, and sustainable production scales that are acceptable to the entire globe, solutions will be deceptively simple. Then at least half of our wakeful life will be spent not in the workplace, as it has in the past, but with our family and community.

If people who become powerless when they ask themselves what or whom they are working for could re-discover what it means to be alive, they will cease to be part of an inorganic cell in a giant corporate organism and become part of a small, life-size community.

We do not have to set up regionalism as an anti-market principle. When we think about when and how the market arose, we know that it was not originally antagonistic to human nature; rather, it started from the standpoint of correcting the impersonality of the feudal age. This means the people's revolution and the market are caught in the chicken and egg argument. The problem of human beings having the power to control other human beings crosses this argument and gives rise to tragedy. The bourgeoisie outnumbered the aristocracy and the proletariat outnumbered the bourgeoisie--and this gave rise to the unsound logic that the majority is the majority and hence is right. Classes existed between people, who should be

equal before God, and the earth was covered by futile disputes about which class should be dominant. Meanwhile, the radical awareness that these were the loud slogans of dogmatists obsessed with the desire for power and that there should be no such thing as classes has been put on the backburner since the time of Thomas Munzer. Instead of denying classes fixed by heredity, we endorsed classes due to the division of labor, and the discrimination inherent in this--particularly economic discrimination and, what is probably more prevalent, discrimination related to opportunity cost--became infinitely expanded by the insatiable self-interest of the upper classes. The desires of each class became quantified and production was expanded, and the ghost of heredity came back to life as a breeding ground for evil was created. Did not the "market" play the role of guru in trying to minimize harmful effects by keeping such unbridled human selfishness under control and establishing a certain order, and by entrusting dynamic economic changes to autonomy instead of human intervention? The market and democracy were systems devised by mere humans.

Because of Shumacher's vision of salvation, namely, that small is beautiful, each individual must have an existence he or she can believe in. Why do we exist and for whom? For the cosmos; for the planet; for humanity. If human existence allowed self-investment for the sake of such grand concepts, we would have no problems. The problem is that the human ego is opposed to the planet, the national or racial ego is opposed to humanity, and the corporate ego and community ego are opposed to the nation, and that these originate in the individual ego, which is probably opposed to all the other egos. The consciousness of people must be led toward the flowering of the unbridled creativity of the individual and by the crystallizing of people's thoughts and actions on the stage of "work" as the work of art of each and every person's life.

When the family is the center around which concentric circles are drawn, the thing that forms the densest aggregation is the local community. The work that contributes to deepening community ties is an extension of the work performed for livelihood, while at the same time being an act of self-expression. The activities that justify existence in doing that work yield a feeling of satisfaction that is completely alien to commercialized work. The social capital subsequently amassed should be a reasonable index of happiness, and the community itself should become the second family.

What is the original meaning of "residence"? I look at it as the designed location of life that has never changed since the Jomon-Period (12500BC-300BC) and will never change, or rather must never change. As the creative work that supports the location of life, "work as expression" clarifies the role of the self in the community, and "work as the expression of love" is at the heart of that work.